

【第一話】二人で大根抜き遊びしていたら最終的に電気あんま大会になって盛り上がりました

「大根抜き、しよ」

隣の家に住む幼なじみのアイがウチに遊びに来たと思ったら突然そんなことを言い出しました。

大根抜き。それは北海道の小学生なら誰もが知っているであろうローカルな遊び。

複数人の大根役が腕を組んで脚を伸ばして座ります。その大根の脚首を引っ張って抜くというゲームです。

私も小学生の頃は学校の休み時間によくやっていました。

……のだけれど。

「二人でやるの？」

「そ！ 斬新でしょ？」

大根役が一人というのは経験がありませんでした。私は力もそんなにないほうだから、最後まで残ったこともありませんでしたし。

「しかも特別ルールで、大根役が抜かれたら今日一日あかちゃん言葉縛りね」

「ちよっと待って。それじゃ不公平じゃん。農家側にも罰ゲーム希望」

「うーん……それじゃ三分以内に抜けなかったらおばあさん言葉縛りで！」

「おっけ」

「まずはレンが大根ね」

「どうしてよ！」

「じゃんけんぼん」

「ぼ、ぼん！」

とっさに出した手はチョキ。

アイの手は、グーでした。

「やрий。レン、すぐチョキ出すもんねー」

「ぐ、ぐぬぬ……」

負けてしまったては不平は言えません。

大根なることを認めて、脚伸ばしたまま床にぺたりと座ります。そして、後ろ手にベッドの脚に掴まりました。さすがに何も掴んでいなければすぐに抜かれてしまうことは目に見えていますから。



なので、そのまま引っ張られたとき、力が入り切っていないかった右の腕だけがベッドの脚から外れてしまいます。

「や……やば、い！」

「お、惜しかったの、にい！」

なんとか左腕だけで踏ん張ります。

他にも全身をなるべく床に密着させ、少しでも摩擦係数を稼ぎます。

「ほら、そろそろっ、諦めて、私に、ばぶばぶうって、しなさい！」

「う、産まれる……産まされる！」

私は妙な危機感に苛まれ、意地でもベッドにしがみついています。

「し、しぶといっ！ ダ……ダメだっ！」

力尽きたように脚首が一旦離されます。その隙に離された片方の腕をすぐさまベッドに戻します。間一髪のところ赤ちゃんにされてしまうところでした。

ピー。

そこで、スマホから残り三十秒を知らせる音が鳴り始めます。

「こうなったら、アレをやるしかないようね」

「……アレ？」

そう言うと、アイはまた私の脚首を掴んで持ち上げます。

そしておもむろに、私の両脚を開かせて右脚まで伸ばしてきました。

その向かう先に、私は戦慄します。

「ちよ、そ、そこは……んひ！」

アイの柔らかい足裏が、ぴったりと私の股の間に埋められてしまいました。

「ほらほらっ！ これでどうだっ！」

そのままぶるぶるぶるぶると足を振るわされてしまいます。

「ち、違う意味で、や、やばいって、これはあ……んっ、んひっ……はあ、あ、あ、あっ、あっ！」

脚を曲げて抵抗しようとしても、むしろより足が股間にくい込んでしまい、力が抜けてしまい逆効果でした。

「ふふ、私知ってるんだよ？ レンって結構こうやって擦られるの好きでしょ。一人で机の角とかでやってるの、部屋の窓から何回か覗いちゃったことあるんだから」

「そ、そんなひい、やられたらあ、ほ、ホントにい、ホントにい……!」

腕の力とかではないところの限界はもうすぐそこまできてしまいました。

「ほらほら、このまま体の力が入らなくなるぐらいイかせて、あ・げ・る♡」

「も、もう……むりい……! い、いく……いくいくいぐう! う、うまれるっ……アイに、うまされちやうううううよおおおお!」

ビクビクビクンっ!

ずざざざざざざあー!ー!ー!

ிட்ட後の脱力時の隙を突かれ、私は呆気なく抜かれてしまいました。

「どうだ! まいったか!」

「ば、ばぶう……♡」

大根みたいに真っ白になった意識で、私はなんとかその一言を返すことで精一杯でした。

【続く】